

2020. 4. 12 第二主日イースター礼拝

ルカ 24:1-12、36-43「主は生きておられる」

聖書

- 1 週の初めの日の明け方早く、彼女たちは準備しておいた香料を持って墓に
来た。
- 2 見ると、石が墓からわきに転がされていた。
- 3 そこで中に入ると、主イエスのからだは見当たらなかった。
- 4 そのため途方に暮れていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着た人が二人、
近くに来た。
- 5 彼女たちは恐ろしくなって、地面に顔を伏せた。すると、その人たちはこ
う言った。「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのです
か。
- 6 ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられた
ころ、主がお話しになったことを思い出さない。
- 7 人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によ
みがえると言われたでしょう。」
- 8 彼女たちはイエスのことばを思い出した。
- 9 そして墓から戻って、十一人とほかの人たち全員に、これらのことをすべ
て報告した。
- 10 それは、マグダラのマリア、ヨハンナ、ヤコブの母マリア、そして彼女た
ちとともにいた、ほかの女たちであった。彼女たちはこれらのことを使徒
たちに話したが、
- 11 この話はたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかつ
た。
- 12 しかしペテロは立ち上がり、走って墓に行った。そして、かがんでのぞき
込むと、亜麻布だけが見えた。それで、この出来事に驚きながら自分のと
ころに帰った。

- 36 これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。
- 37 彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った。
- 38 そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか。
- 39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。」
- 40 こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた。
- 41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていたので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。
- 42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、
- 43 イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった。”

はじめに

2020年のイースターおめでとうございます。今日は新型コロナウイルス拡大防止のために、集まって礼拝をささげることをせずネット配信またはご自宅での礼拝となりました。いつもと異なる礼拝形式ですが、礼拝をささげる意義は変わりませんし、私たちは主にあって一つですから、それぞれの場所で復活の主を喜び、新しい週を出発しましょう。本日と4/19、4/26の3回の礼拝をネット配信またはご自宅での礼拝としますので、集まることができない期間、お互いのために祈り、必要に応じて互いの安否を確かめながら、キリストのからだである教会の一体性を保って過ごしたいと願います。

今日は主の復活の事実を目を向けます。空の墓を見せ「ここにはおられません。よみがえられたのです。」(6節)と語る御使いのことばには、どのような意味があるのでしょうか。ここにはおられないとすれば、主イエスさまはどこにおられるのでしょうか。

1. 復活の前提

先週はキリストの最後を記念する受難週でした。イエスさまが十字架につけられた「グッドフライデー (Good Friday)」とその後の埋葬はとても重要な意味を持っています。人々は死んだ人間がよみがえることなど信じられないので、復活を否定する諸説が出てきました。死んだように見えたが実は死んでおらず息を吹き返した蘇生説、弟子たちが盗んで行ったという盗難説、空の墓を見たとき気が動転してしまい正常な判断ができなかったという動転説、恐ろしさのあまり幻を見たのだという幻覚説など、いろいろと考える人たちがいました。しかし、そうした考えが表れることを見越していたかのように、聖書の記述は丁寧にある事実を記しています。それは、間違いなくイエスさまは死んだという事実です。

この前提が崩れてしまうと、それに続く復活の根拠も失われてしまいますので、イエスさまの死がいかに確かなものであったのかが重要になってくるわけです。死の事実を確かめるために聖書の記述を一ヶ所だけ引用します。「その日は備え日であり、翌日の安息日は大いなる日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に死体が十字架の上に残らないようにするため、その脚を折って取り降ろしてほしいとピラトに願い出た。そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた一人目の者と、もう一人の者の脚を折った。イエスのところに来ると、すでに死んでいるのが分かったので、その脚を折らなかった。しかし兵士の一人は、イエスの脇腹を槍で突き刺した。すると、すぐに血と水が出て来た。」(ヨハネ 19:31-34)。こうしてイエスさまの死は確かなものとなり、埋葬されたのです。

2. 墓にはいない事実

安息日が明け、週の初めの日(日曜日)の朝早く、マグダラのマリアたち数人の女性が香料をもって墓にやって来ました。すると、墓の入り口を塞いでいた石は取りのけられ、中に入るとあるはずのイエスさまの遺体がないのです。当時のユダヤの墓は岩を掘って納めるもので日本の墓のイメージとは異なりますが、彼女たちは埋葬の様子を一部始終見届けていますから、イエ

スさまの遺体がないことを見て「恐ろしくなって、地面に顔を伏せた」(5節)のです。そこに現れた御使いは「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中で捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。」(6節)と復活の事実を告げます。この御使いのことばは、私たちの常識に挑戦状を突き付けるものとなります。「どうして生きている方を…」と、イエスさまは生きておられる方だということです。生きておられるのですから、墓の中にいるわけがないということです。現状の認識が私たちと全く違います。

私は何人かの方の葬儀や納骨に立ち会ってきました。時には墓の中に納められた遺骨を見て、在りし日を偲びます。私も実家の墓を整理し、教会の復活苑に移すとき、祖父母の遺骨を取り出し、在りし日を懐かしんだことを思い起こします。私たちにとって遺骨があることが前提です。しかし、イエスさまの場合は、その前提が覆されてしまったことで私たちの思考が混乱するのです。その混乱を治めるためには「ここにはおられません。よみがえられたのです。」ということばを受け入れるしかないのです。

3. 真ん中に立つイエス

ここにはおられないお方をどこで捜せばよいのでしょうか。イエスさまがよみがえられた日、二人の弟子がエルサレムからエマオという村に向かって歩いていました。そこに復活の主が現れてくださったのです。その詳細はルカ 24:13-35 に記されていますが、今日はそれに触れることはいたしません。この二人の弟子たちが復活の主にお会いした経緯を他の弟子たちに話していると、そこに復活のイエスさまが現れてくださったのです。

「これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、『平安があなたがたにあるように』」(36節)と言われました。エマオでの経験に耳を傾ける弟子たちの「真ん中」にイエスさまは立たれました。イエスさまはこの後一週間後にも再び弟子たちにご自分の姿を現わされました。そのときも「彼らの真ん中に立ち」(ヨハネ 20:26)、同じように「平安があなたが

たにあるように」と語られました。端ではなく真ん中です。恐れや疑いを抱く弟子たちの真ん中に立ち、ご自分を示されたのです。そのイエスさまは今恐れや疑いを抱く私たちの真ん中に立っておられます。

折しもコロナウイルスの影響で集まることを自粛しています。それゆえに「真ん中」ということばに強く心が惹かれます。普段の礼拝の中でも「この礼拝の真ん中にイエスさまはおられるのですよ」ということをしばしば語ってきました。兄弟姉妹が一堂に会する礼拝の場は、真ん中におられるイエスさまを意識しやすいです。しかし、今日からしばらくの間はこの状況を作り出すことができません。できないからこそ、「真ん中」におられるイエスさまを強く意識したいと思われています。教会の皆さんが住んでおられる場所を思い描いてみてください。豊田市内の方々、近隣の市町村の方々、さらには他県におられるの方々、今日はそれぞれの場所で礼拝をささげていますが、その「真ん中」にイエスさまはおられ、一つにまとめてくださっているのです。教会ということばは建物をイメージしやすいですが、そうではなく、普遍的なキリストのからだを指していることは皆さんもご承知の通りです。物理的な距離を感じる礼拝であるがゆえに、「真ん中」に立たれるイエスさまを中心に、この難局を乗り越えていきましょう。私たちは一つです。その中心によみがえられたイエスさまがおられますから大丈夫です。

4. 平安があなたがたにあるように

「真ん中」に立たれるイエスさまは「平安があなたがたにあるように」（36節）と平安を約束してくださいました。イエスさまの復活に伴う平安については次主日に味わいますが、弟子たちに今一番必要だったのが平安でした。弟子たちの失望は、イエスさまを十字架につけると叫んだ群衆とは大きく違っていました。群衆はイエスさまに政治的救世主を期待しましたが、その期待が失望に変わったことでイエスさまを退けました。十字架につけられたイエスさまに宗教家たちは「今、十字架から降りてもらおう。それを見たら信じよう。」（マルコ 15:32）と挑発しましたが、これが人々にとっての最後の

望みだったのです。イエスさまが十字架から降りてきて、自らが救世主であることを証明する最後のチャンスでした。誰もが奇跡を望んだのです。しかし、それは起こりませんでした。期待が大きかった分、失望も大きかったのです。しかし、弟子たちの失望は群衆とは違っていました。師であり先生として従って来た存在が奪われてしまったことの失望で、この先どうすればいいのかという不安と恐れの入りが混じった深い失望です。

時に人はこのような深い失望に落とされることがありますが、そこに投げかけられることばがどのようなものかによって、その先が決まるといっても過言ではありません。ともすれば、私たちは苦悩の中にいる人に励ましのことばをかけてしまうかもしれません。頑張れない人に頑張りなさいと声をかけるかもしれません。人が本当に必要としていることばは、もしかしたら励ましのことばではないのかもしれません。イエスさまは言われました。「平安があなたがたにあるように」と。そこには弟子たちを励ますことばもなければ、責めることばもありません。ただ「平安があるように」と言われて、刺された手と足の釘の後を見せて「まさしくわたしです。」(39 節)と安心を与えてくださったのです。それでも信じられない弟子たちに「ここに何か食べ物がありますか」(41 節)と言って、焼いた魚を弟子たちの前で食べて、よみがえりの事実を示されたのです。イエスさまは平安をもって、私たちに近づいてくださるお方です。平安があるところにイエスさまもおられるということです。今週の愛する皆さんの上に、復活の主の平安がありますようにお祈りします。

まとめ

イエスさまは確かによみがえり、今も生きておられます。この礼拝の真ん中に立ち、平安を与えてくださいましたことを感謝します。イエスさまの平安は世の何かによって奪われるものではありません。イエスさまが共におられる限り与えられ続ける平安です。今週の歩みが主の平安の中に保たれますようにお祈りしましょう。復活の主の同行を信じて。